

## 令和4年度 地域づくり表彰 総評

創意と工夫を活かした個性ある地域づくり活動を奨励する「地域づくり表彰」につきましては、昭和59(1984)年から始まり、今回が第39回目となります。

今年度も全国各地から昨年度を2件上回る計32件の多様な事例が推薦されて参りました。

厳正な審査の結果、今年度は、総合的に最も優れた事例を表彰する「国土交通大臣賞」2事例、地域活性化で極めて優れた事例を表彰する「全国地域づくり推進協議会会長賞」2事例、国土政策の観点から優れた事例を表彰する「国土計画協会会長賞」1事例、地域経済や産業振興の観点から優れた事例を表彰する「日本政策投資銀行賞」1事例、地域活性化で優れた事例を表彰する「地域づくり表彰審査会特別賞」2事例の計8事例を表彰することといたしました。

今年度は、いずれの事例も、地域の危機感を明確に意識しつつも、それに怯まず「ピンチを、チャンスに」という発想のもと、地域愛を核とした「地域の視点」「地域のニーズ」「地域の文化」「地元の歴史の尊重」「地域の良いところを外に発信したい」等の、地域づくりの本来の価値観を大切にすることを心がけておられたことが特徴だったと感じました。それを逆に言い表した「いたずらに数を追わず、無理に外に合わせない」という言葉も印象に残りました。

また、複数年続いたコロナ禍で得られた知見として、フェイス・トゥ・フェイスで繋がる意義と価値が、より広く、より強く認識されていたことです。「人と人との繋がり」「顔の見える関係」という言葉が、各団体の説明に何度も登場した点がそれを表していたと感じます。

手法については、従来、「負の遺産」と捉えられがちな耕作放棄地・老朽団地等、低・未利用の公共空間・施設等を、人々が出会い、自然に集える「居場所」として再定義して、それらの再生を目指した試みも多く見られました。

これらは、利用に際し大きなコストが掛かりにくい点でも有利であったかと思えますし、そのことで、肩に過度に力が入らない、ゆったりとした、お取組の態度にも表れていたと感じます。

無理に「人を集める」のではなく、自然と「人が集まる」場づくり、そのために、著名で特別な観光資源に頼らずとも、外部の方々の協力も得ながら皆で地域独自の魅力を見出し、その魅力を軸として人に出会うこと・関わることを大切にしてゆく取組は、これから、どの地域でも真似ができ、全国各地に勇気とやる気を起こさせるものとして、是非ご紹介申し上げたい事例であると感じた次第です。

審査会でも「コロナ禍で新たな価値を認識した、改めて日常の大切さに思い至った。そのことは良かった」というお話もあり、山あり谷ありのピンチに直面しても、地域の価値観を大事にし新たな取組に挑戦できた地域が、結果として持続可能な地域になっているようにも感じました。

新旧の公共空間だけでなく、人口流出やコロナ禍等も含めた「負の遺産」を再認識し、改めて人々が出会い・自然に集える「場」や活動着手のきっかけとする試みは素晴らしいものであり、同じような悩みを抱える全国各地の地域づくりのヒントや指針になるものと確信しております。

受賞各団体におかれましては、表彰を機に、ますますの活発な取組みを進められることをご祈念申し上げますとともに、全国各地の皆様が、各表彰事例をご参照され、地元の施策の参考としていただき、機会がありましたら、事例の地を訪れ、当事者の皆様とご交流されること等により、個性的で魅力ある新たな地域づくりの輪が、更に広がっていくことを期待しております。

令和4年度地域づくり表彰審査会 座長 坂田 一郎  
(東京大学 地域未来社会連携機構 機構長 兼 工学系研究科教授)